共星

―ひとつの星に生きることを知る―

宇宙へ旅立つことは、地球から離れることではなく、
地球を見つめ直すことである。宇宙と直接交信し、
情報技術を通してその営みを体感することで、
人類が同じ「宇宙船地球号」の乗組員であることを認識し、
持続可能な未来への意識を育む公共建築を提案する。



宇宙船の機能 ｜ 大型客船のような多様な機能を備えた宇宙船



- **ブリッジ／管制室**
  航行制御、システム監視、宇宙・地球との通信を担う
- **観測・交信センター**
  宇宙や地球の観測、宇宙船との直接交信を行う中枢施設
- **居住モジュール**
  長期滞在に適応した個室空間、健康や共有リビングを備える
- **医療・バイオモジュール**
  医療施設やバイオ研究設備を備え、乗員の健康と研究活動を支える
- **エネルギーコア**
  太陽光発電やエネルギー貯蓄、配電管理を行う心臓部
- **展望デッキ／地球ラウンジ**
  宇宙から地球を一望できる展望空間、イベントや講演も開催
- **ラウンジ／交流エリア**
  乗員や来訪者が交流し、学びや対話が生まれる空間
- **エンターテインメントエリア**
  VR体験、シアター、ライブホール、図書館などの文化施設
- **レストラン／カフェ**
  食事や休憩を楽しむ空間、地球食の文化を体験できる
- **ドッキング／エアロック**
  宇宙船との接続、物資や人の乗降を行う出入口

その他の機能：教育センター／スポーツジム／スパ／キッズルーム／ショップ／礼拝室／会議室／工房　など



宇宙との交信がもたらす意識の変化と未来への行動



01 宇宙へ行く
地球を離れ、宇宙という新たな環境へ身を置き、宇宙そのものとつながる。

02 宇宙を体験する
宇宙環境を五感で体験し、宇宙の壮大さや多様な営みを感じる。

03 地球を客観的に見る
宇宙から地球を眺め、気候・環境・資源・社会のつながりを理解する。

04 地球は一つの宇宙船だと気づく
国境や対立を超え、人類が同じ宇宙船地球号の乗組員であると認識する。

05 協働・持続可能な未来へ
すべての命が共存できる持続可能な未来に向けて、行動し、未来をつくる。

宇宙と地球をつなぐ体験を通して、私たちは同じ宇宙船「地球号」の乗組員として、未来を共に築いていく。

情報技術を取り入れ ｜ 宇宙と人をつなぐ知的基盤

情報技術やAIは、宇宙との交信を深め、体験を拡張するだけでなく、
宇宙船そのものの仕組みや運用を最適化し、安全で持続可能な宇宙での暮らしを支える。

01 宇宙での交信を可視化する



- **AI×観測・可視化**
  天体や宇宙環境の情報をリアルタイムで取得・可視化
- **見えない現象を体感**
  データや映像で、肉眼では捉えられない宇宙を体感

02 体験を拡張し、深める



- **AR・XRで宇宙を体験**
  没入感のある体験で、理解と興味をさらに広げる
- **AIパーソナルガイド**
  興味やレベルに合わせて情報や体験を提案

03 宇宙船内部の最適化と安全性



- **AI総合制御システム**
  環境・エネルギー・設備を最適化し、快適で効率的な運用を実現
- **予測保全・安全管理**
  異常の予測やリスク検知で、安全な宇宙生活を支える

04 地球とのつながりを強化する



- **リアルタイム通信**
  地球と高速・安定通信でつながり、データや映像を共有
- **クラウド連携・データ共有**
  研究機関や教育機関とつながり、知識や経験を共有

情報技術は、宇宙と人をつなぎ、宇宙船そのものを賢く進化させる。
宇宙との対話をより豊かにし、持続可能な未来へとつなげる。

未来の公共インフラになる流れ

1. 研究・実証段階（～2035年頃）
政府・企業・研究機関が中心となり、宇宙船の技術開発と実証を行う。

2. 限定運用段階（2035～2045年頃）
一部の研究者・教育機関・企業ミッションを中心に運用を開始。

3. 民間参入・拡張段階（2045～2060年頃）
民間企業の参入により、サービス拡充・コスト低減・運用体制が拡大。

4. 公共インフラ化（2060年以降）
誰もが利用できる宇宙の交通・学び・文化・研究の基盤に。

技術の進化 → コストの低下 → 利用者の拡大 → 社会的価値の向上

